スポーツはなぜナショナリズムと結びつくのか：日本における先行研究の批判的検討

Why Do Sports Link to Nationalism?: A Critical Examination of Previous Studies in Japan

キーワード：スポーツ・ナショナリズム、ナショナリズムの定義、説明的研究、「日常」レベルのスポーツ・ナショナリズム
Key Words: Sport Nationalism, Definition of Nationalism, Explanatory Study, “Everyday” Level of Sport Nationalism

笹生　心太
SASAO Shinta

Abstract

This study reviews the existing literature on sport nationalism in Japan and details its results and limitations. The literature review reveals that previous studies have identified multiple incidences in which sports and nationalism have been found to be linked, and also suggest a research methodology. Furthermore, three limitations were found in the earlier research, namely that there is no specific definition of “nationalism”, that there are several descriptive studies while explanatory studies are few, and that the studies often refer to “extraordinary” examples, but rarely to “everyday” examples. Future works should discuss how to define sport nationalism, include explanatory research into the link between sports and nationalism, and identify “everyday” examples.

1．はじめに

2016年夏に行われたオリンピック・パラリンピックリオデジャネイロ大会では、世界中の人々が、一流アスリートのプレーに感動を覚えた。日本でも、多くの人々が日本人選手の活躍に沸いた。こうした光景は、各競技のワールドカップなどその他の国際スポーツイベントでもよく見られるものである。我々の国際スポーツイベントへの興奮には、確かに一流選手の動きや表現に感動することや、熾烈な競争に感動を覚えることもあるだろうが、ごく素朴な感覚として、同じ国籍を持つ選手の活躍に感動する場合が多いのではないだろうか。一般的に、こうした同じ国籍を持つ者に対する共感・感情移入は、ナショナリズムと言われる。

ナショナリズムという現象は、実はとても奇妙なものである。自国のスポーツ選手を応援する感覚は「当たり前」のものに感じられる。だが、例えば日本国籍の人間にとって、同じ東アジア圏の選手だからという理由で中国人選手を応援する人が少ないのは、なぜなのか。同じ地球に住む人間だから、ヨーロッパやアフリカの選手を熱狂的に応援する場合がほとんどないのは、なぜなのか。逆に、直接会ったことがないという理由で、日本人選手を応援しない人はあまり

いないのは、なぜなのか。このことは、以下のように言い換えることができる。ほとんどの日本人は、家族、学校、企業、市区町村、都道府県、日本、アジア…と、同心円的に様々な社会に所属しているが、その中でも日本という単位はとりわけ「こだわり」の対象としての拘束力が強いのである。

そうした感覚は、スポーツの場面でよく表れるが、スポーツ特有の現象ではない。例えば大規模な災害が起こった場合にも、被災地から遠く離れた同国内の地域に住む人が義捐金を送ったり支援を行ったりする場合があるが、地理的に近い海外の地域（例えば沖縄県民にとっての台湾など）に対してそうした積極的な行動をとるケースは比較的少ないと考えられる。

以上のように、スポーツという文化は人々に対してナショナリズムの感覚を喚起することが多いが、一方で、そもそもネーション[注1)]や国家とは何なのかという問題提起を行う場でもある。例えば国際サッカー連盟（FIFA）には211の国家および地域が加入しており、その数は国際連合（国連）加盟国数の193よりも多い（2016年9月現在）。このずれは、例えば国連では英国は1つの「国家」とされているが、FIFAではイングランド、北アイルランド、スコットランド、ウェールズと4つの「国家」（協会）が承認されていることなどに由来する。またFIFAに限らず、国際オリンピック委員会（IOC）においても、同様に国連に加盟していない地域を「国家」（委員会）として承認する場合がある。

国際スポーツイベントは、いまだ「国家」として承認されていない地域や人々の集団を模擬的に「国家」として認め、世界中の人々にその承認を取り付ける作用を持つことがある。例えば2016年現在、コソボは国連に加盟するすべての国家から独立国として承認されているわけではなく、セルビアの自治州とみなされる場合もある。だが2016年のオリンピックリオデジャネイロ大会には、IOCによって正式に承認された1つの「国家」として参加した。このことは、コソボは「自治州」ではなく「国家」であるという認識を、世界中の人々に浸透させることにつながるだろう。

以上のようにスポーツは、人々に対してナショナリズムを喚起する文化装置として機能する一方、難民などの多様な人々を承認し、開かれた国際共同体を形成する可能性をも有していると言える。

2. 本稿の課題

ここまで見てきたように、スポーツはナショナリズムと結びつきが深い。だが、後に見るように、意外なほどにこの結びつきに関する社会学的研究は進展していない。本稿では、以下、スポーツと結びついたナショナリズムを「スポーツ・ナショナリズム」と呼び、この現象について主に日本ではどのような研究が進行しているのかをレビューし、その成果と限界をまとめる。この作業は、後に続くスポーツ・ナショナリズムに関する実証的研究のための基礎作業である。

こうした日本におけるスポーツ・ナショナリズムに関する研究の重要性は、1つには来たる2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会に関連している。2020年には、従来の国際スポーツイベントと同様に、日本の人々は自国選手の活躍に大きな声援を送るだろう。そしてそれと同時に、ホストカントリーとして多くの外国籍選手や観光客を迎え入れねばならない。だが現在は、外国人に対するヘイトスピーチが横行するなど、排外主義的なナショナリズムの兆候も見られる。こうした排外主義的ナショナリズムとどう向き合うべきか、他者と共存するようなナショナリズムは構想し得ないのかといったテーマは、スポーツ社会学領域に与えられたきわめて重要なテーマである。スポーツ・ナショナリズムについて考察することには、こうした実践的な意義があると考えられる。

3. 分析

3-1. 先行研究の全体的動向

スポーツ・ナショナリズムについては、一般社会学におけるナショナリズム研究からのスポーツへの着目と、スポーツ社会学領域におけるナショナリズムへの着目という、2つの視角からの研究がある。

一般社会学の諸研究は、ナショナリズムを発生・維持させる装置として、言語、新聞や小説などの出

版物、地図、博物館、国旗・国歌などに言及し、それらとナショナリズムの発生・維持の関係性を説明してきた。一方、スポーツもまた、それらと並んで頻繁に言及される。例えば「大戦間に、スポーツは、国家間闘争の一表現となり、ネイションあるいは国家を代表するスポーツ選手たちは何よりもまず彼らの想像の共同体を表現するものとなった。［中略］何百万人もの人々にとっての想像の共同体は、実在の11人のチームによって、いっそうリアルに感じられるのである」（ホブズボーム1992=2001、pp. 184-185）、「ナショナリズムの展開を考える上でスポーツの役割はきわめて重要である。公の場における国旗・国歌の積極的使用は、文部省を中心に1950年代から推し進められてきた。ところが、このような国家的政策はむしろ反対派を刺激し、国旗・国歌が積極的に受容されなかった経緯がある。ワールドカップは文部省が1950年代からやろうとしてきたことを一夜でやりとげてしまった、と言うことに一面の真理はあるであろう」（吉野2007、pp. 7-8）のように。

このように、一般社会学の諸研究はスポーツに対して再三言及するものの、スポーツの事例に入り込んで具体的に分析した研究は管見の限り見当たらない。つまり、現象としてスポーツがナショナリズムの発生・維持に関係していることは認識されているが、その他の装置に関する説明とは異なり、スポーツの作用について詳しく説明されることはほとんどなかった。

一方、スポーツ社会学領域におけるナショナリズム研究の第一人者と言えるベアナーは、スポーツとナショナリズムに関する国際的な研究蓄積をまとめたレビュー論文（Bairner 2015）の中で、スポーツ社会学はメインストリームのナショナリズム研究の議論を無視してきたとし、ナショナリズム研究における諸概念、例えば「想像の共同体」といった概念自体をスポーツの側から問い直すような姿勢を持ってこなかったと指摘した。このことは、日本における研究状況に限定しても同様である。先行研究の状況は後に詳しく検討するが、スポーツ・ナショナリズムに関する記述的言及は多く見られ、重要な指摘がいくつもなされている。しかし、スポーツとナショナリズムはなぜ、いかに結びつくのかという大きな問いに対して、説得的な答えが出されているとは言い難い状況である。

3-2. 先行研究のレビュー

以上のような全体的な研究動向を把握したうえで、具体的な研究内容の検討を行う。以下ではまず、スポーツ・ナショナリズムとは何かという主題に取り組んだ4つの体系的な研究、すなわち中村敏雄編著『スポーツナショナリズム』（中村1978）、石坂祐司・小澤考人編著『オリンピックが生み出す愛国心』（石坂・小澤2015）、土佐昌樹編著『東アジアのスポーツ・ナショナリズム』（土佐2015）[注2)]、そして内海和雄『オリンピックと平和』（内海2012）についてレビューした後に、いくつかの重要な個別研究のレビューを行う。

(1) 体系的研究

スポーツとナショナリズムの結びつきについては、中村（1978）がその先駆的研究である。同書は、スポーツがナショナリズムと結びついており、しかもそれがインターナショナルに承認されているという状況のメカニズムを解明することを中心的関心としている。その課題設定の章を担当した中村は、「スポーツナショナリズム」の語を「スポーツに現れたナショナルな傾向」（p. 34）と定義した。そして、続く各章では、日本、英国、ドイツ、ソヴィエト連邦などを事例としつつ、スポーツがインターナショナルに普及していく中で、次第にその担い手がブルジョワジーの独占から大衆のものへと移行していった過程、あるいはその過程の中で各国の国民性とスポーツのあり方の関係性が変化したことなどについて明らかにした。

中村（1978）以降、スポーツ・ナショナリズムに関する体系的な研究は長らく行われてこなかったが、近年では石坂・小澤（2015）や土佐（2015）のような研究書が次々に出版されている。

石坂・小澤（2015）は、スポーツもナショナリズムもきわめて社会学的な主題であり、そのために特定の社会的条件下でダイナミックに異なる諸相を持って結びつく点を、スポーツ・ナショナリズムの特徴として挙げている。そうした関心から編まれていることから、本書では、ナショナリズムがスポーツの場で発生す

るその仕方、それが発生する文脈や条件、そのイデオロギー的な作用と効果、そしてそのイデオロギーの発生／受容のずれといった点を焦点とした。具体的には、オリンピックや、日本における体操、日仏における柔道といった事例の分析を通じて、筆者らの意図通り、スポーツとナショナリズムの思いがけない結びつきやダイナミックな変化のプロセスを浮かび上がらせている。

一方土佐（2015）は、スポーツとナショナリズムが結びつきやすいのは、両者ともパラドックスを内包しているからであるという見通しを示す。ナショナリズムには、「静かな」顔と「熱い」顔がある。前者は自分達が共同体を形成しているという想像を内面化する過程であり、後者はそうした共同意識を再確認するために他者を攻撃するような排他的傾向を獲得する過程であるが、こうした相反する顔を持つことがナショナリズムの特徴である。一方のスポーツは、「これは遊びに過ぎない」というメタ・コミュニケーション的メッセージを内包するにもかかわらず、ときに模擬的な戦争と言えるほどエキサイトすることがある。このように、スポーツとナショナリズムはいずれもパラドクシカルな2つの顔を持つがゆえに結びつきやすいというのが、課題設定を担当した土佐の見通しである。そして、こうしたパラドックスを解きほぐすために、東アジアの緊張関係に着目する。具体的には、日本・韓国・中国の3か国の事例について、それぞれ社会レベルと政策レベルから分析を加えている。全体をこの2つの水準から串刺しにすることで、論考全体としての統一感を生みながら、各国の多様な事例を明らかにした。なお本書では、スポーツを通じた東アジアの平和構築という志向性を持った形でナショナリズムが論じられている。

以上のようなスポーツ・ナショナリズムを前面に出した研究ではないが、オリンピックと平和の問題を論じるうえでスポーツ・ナショナリズムを詳細に論じたのが、内海（2012）である。本書はオリンピックを通じた平和構築を研究主題としているため、特にスポーツの場面におけるナショナリズムが、排外的愛国主義であるショーヴィニズム（chauvinism）から排外的ではない愛国主義のパトリオティズム（patriotism）に転化されるための条件という点に焦点を当てて考察を行っている。そして英国圏におけるスポーツ・ナショナリズムの事例と研究状況を概観し、最後には今後のスポーツ・ナショナリズム研究の課題を3点挙げている。それは、スポーツ・ナショナリズムが平和推進にも武力衝突にもつながり得るメカニズムの解明、スポーツ・ナショナリズムと政治的ナショナリズムの結びつきのメカニズムの解明、そしてスポーツイベントの開催前・中・後のナショナリズムの問題のされ方の変化の解明の3点である。以上のように本書は、スポーツ・ナショナリズム研究の動向と今後の課題を導出している点で、本稿と同様の方向性を志向するものである。

(2) 個別研究

一方、以上のようなスポーツ・ナショナリズムとは何かという問いに対する体系立った研究でなくとも、個別にナショナリズムの問題に論究するスポーツ研究も多く存在する。以下では、スポーツとナショナリズムの問題を主題（あるいは主題の1つ）として取り上げた個別研究について、その着目した点ごとに3つの研究群に分けて簡単にレビューしていく。

第1の研究群は、国家によるスポーツやスポーツイベントの編成過程の中で、それらがナショナリズムに利用された事例を分析するものである。特にスポーツ史領域では、こうした事例について重厚な研究が蓄積されている。具体的には、昭和期における集団体操（佐々木2016）や戦後の国民体育大会（権2006）などの研究に代表される。また具体的な種目を通じた研究ではないが、昭和初期におけるスポーツ全般を国民統合のための権力装置と位置付けた坂上（1998）もまた、この研究群に含むことができるだろう。

これらの諸研究は、主に国家の政策的意図の分析を行い、国民のナショナリズムを煽るためにいかにスポーツが利用されたのかを明らかにしようとしてきた。中でも、国家政策（軍事、皇室、厚生、外交など）の変化に伴ってナショナリズムがどのように用いられようとし、そこにスポーツがどのように関連していったのかを明らかにした点に独自性があった。

第2の研究群は、スポーツ・ナショナリズムの問

題をメディアの視点から分析したものである。1930年代から40年のオリンピック3大会を報じるメディアに着目した浜田（2016）は、新聞と雑誌における日本の表象のあり方の推移を分析した。その結果、当時のオリンピック報道がインターナショナリズム志向からナショナリズム志向へと変化していく中で、人々が、例えば「この商品を買えば日本人選手を応援することになる」などと煽った商品を消費することで、一種の娯楽としてこうした感覚を受け入れていったことを明らかにした。

一方、国際スポーツイベントの報道における「神話」の意味内容を分析した研究として、山本（2010）が挙げられる。山本は、「黒人選手の身体能力的優位性」や「日本人選手の組織力」といったスポーツの国際試合の報道によく見られる表現は、一種の「神話作用」に支配されていると論じた。そして、驚異的な身体能力を持った他国選手を目にすると、それに対する劣等感を埋めるために日本人は組織で補完するという物語を編み出し、結果「我々日本人」への自己同一化が行われることを指摘している。

以上のようなメディアの視点からスポーツ・ナショナリズムに論究する研究群は、スポーツに関するメディアの表象を質的・量的に分析することで、メディアがいかに人々のナショナリズムを煽ったかを明らかにしてきた。

第3の研究群は、より原理的にスポーツ・ナショナリズムの問題に取り組み、その研究上の方法論の見通しを示したものである。吉見（1999a）は、従来のスポーツとナショナリズムの結びつきを自明視するのではなく、「スポーツする身体の基盤にあるより越境的な身体文化が、いかなる仕方でネーションの編成に巻き込まれていったのか」（p. 42）を問うことの必要性を強調する。こうした指摘の根底には、従来のスポーツ・ナショナリズム研究が、国家という主体がスポーツを手段として人々を操作・統合してきた点を強調し過ぎてきたことへの反省がある。吉見は、そうではなく、国家によるスポーツを通じた統制に対する国民の身体の側からの抵抗や、そこに見られた矛盾といった観点を導入する必要性を論じる。その例として、吉見自身が行った明治期の運動会研究（吉見1999b）がある。同研究では、明治政府が国民の身体をナショナルにまとめ、訓練し、それを披露するための場として用意した運動会が、大衆の側からは一種の娯楽や祝祭として読み替えられていたことが示されている。

また有元（2012）は、スポーツとナショナリズムの接合の仕方について、構造的次元と歴史的次元の2つの次元から類型化を試みた。構造的次元については、日本全体から選抜された代表チームを応援するような垂直のナショナリズムと、多くの国民が一斉に体を動かすような水平のナショナリズムという分類を設定した。一方の歴史的次元については、従来は国家政策の中でスポーツが利用されるような政治的ナショナリズムが支配的だったが、近年では企業の宣伝などにスポーツが利用される経済的ナショナリズムが増加しつつある。以上のような、垂直／水平のナショナリズム、政治的／経済的ナショナリズムといった区分を設けることで目指されたのは、スポーツとナショナリズムの接合の多様なあり方を示すことである。

以上のような研究は、スポーツ・ナショナリズム研究の方法論を構想した点で、この分野の研究の今後の深化の方向性を示すような研究と言える。

3−3. 先行研究の成果

以上、ごく簡単に、日本におけるスポーツとナショナリズムに関する社会学的研究の内容をレビューしてきた。次に、これらの研究の成果について整理する。

(1) 多様な事例の発見

先行研究のもっとも重要な成果は、実に多様なスポーツ現象がナショナリズムと結びついてきたことを明らかにした点である。すでに述べてきたように、集団体操、武道、運動会、国民体育大会、オリンピックなどは、ナショナリズムとは無関係には普及し得なかった。さらにここまで挙げなかった研究でも、戦後期のプロレス（朴2016）や、高度経済成長期以降のボクシング、プロ野球、相撲などの人気スポーツ（寺沢2016）もまた、ナショナリズムと強く関係して発展してきたことが指摘されてきた。

さらに、日本の事例ではないが、IOCにおけるナ

ショナリズム排除の議論（黒須2014）や、オリンピックロンドン大会によって英国の多民族性がポジティブに表象された事例（金子2015）など、スポーツがナショナリズムに単純に利用されたわけではないという事実も発見されつつある。

(2) 研究上の方法論の提起

先行研究の成果の第2は、スポーツ・ナショナリズム研究を行ううえでの方法論上の見通しを示している点である。例えば、山本（2010）のようなカルチュラル・スタディーズの立場からの研究は、スポーツや身体に関する研究が前提としてきた方法論的ナショナリズムという視角を指摘した。これは、ある現象（例えば身体能力の高低）に対する関心を、ジェンダーや階層といった単位ではなく、ネーションという単位によるものと自明視する分析枠組みのことである。この方法論的ナショナリズムを批判的に捉えることで、スポーツ・ナショナリズムという現象を相対化することが可能となる。そして、人間を取り巻く様々なコミュニティや属性の中でも、とりわけネーションという単位の拘束力が強いのはなぜかという問いを立てることが可能となる。ただし、いまだこうした視角からの研究は実証的な水準にまで高まっていないという限界もある。

3–4. 先行研究の限界

以上のように先行研究は重要な成果を上げてきたが、一方でいくつかの限界を抱えている。

(1) ナショナリズムの理解に関する限界

先行研究のもっとも大きな限界は、ナショナリズムに関する定義がなく、スポーツ・ナショナリズムなるものが総花的に展開している点である[注3)]。例えば、中村（1978）が検討したようなスポーツの場面に現れる国民性は、ナショナリズムというよりもナショナリティの議論ではないか。また、寺沢（2016）が分析した高度経済成長期のプロ野球などは、まさに国民的人気を生んだコンテンツではあったが、それは果たしてナショナリズムという感覚に根差した人気であったのだろうか。こうしたナショナリズム理解の無限定な拡大は、ナショナリズムというものを定義付けていない点に由来する。一般社会学においても、ナショナリズムの定義の「決定版」のようなものは今のところ存在しないが[注4)]、それでも研究ごとにこれを操作的に定義する必要はあるだろう。

またそれに関連して、ナショナリズムを基本的に排外的現象として規定している点にも限界がある。第二次世界大戦においてスポーツが排外的ナショナリズムに利用されたことへの反省から、多くの研究が国家によるスポーツ利用を批判的に捉えてきた。もちろん、戦前期･戦中期のスポーツが排外主義的ナショナリズムに利用された過去を分析すること自体には、きわめて重要な意味がある。だが本来、ナショナリズムとはより広い意味で捉えられるべきものであり、排外性や偏狭性はナショナリズムという現象の基本原理ではない[注5)]。有元（2012）が指摘するように、スポーツとナショナリズムの結びつきには、多様な形態があり得るのである。

(2) 説明的研究の不足

先行研究の限界の第2は、多くの研究がスポーツとナショナリズムの結びつきを記述するにとどまり、それが説明の水準にまで発展していないことである。例えば石坂・小澤（2015）は「本書に収録された各論文は、したがってある1つのナショナリズム理論の適用や理論的モデルの構築を目指すのではなく、以上のような視点を取ることで浮かび上がる多様で複雑な奥行きについて、具体的・経験的主題との関わりの中からいくつかの特徴的な輪郭を描写することをねらいとしている」（p. 10）と、多様で複雑な事例を描くことに専従している。もちろん、様々なスポーツが様々なネーションと関わっていることを丹念に記述し、その関わり合いの複雑さを素描することには重要な意味がある。しかし、先行研究の多くは事例を積み重ねるのみであり、なぜスポーツはナショナリズムと結びつきやすいのか、どのような社会的条件下でスポーツとナショナリズムは結びつくのかといった問いにまで発展してこなかった。

(3) 分析の射程の限界

先行研究の第3の限界は、分析の射程に関する

限界である。上述のように、確かに先行研究はスポーツとナショナリズムの結びつきの多様な諸相を描いてきたものの、それらは主に国際スポーツイベント、あるいは国民体育大会のような国内のスポーツイベントに関連付けて分析するものがかなりの割合を占めている。本稿の導入でもスポーツイベントの事例を例示したように、確かにスポーツイベントは、スポーツ・ナショナリズムの問題を考えるうえで格好の事例である。そして、それに関する研究が重厚に積み重ねられることにも、重要な意味がある。しかし、こうした「非日常」の舞台におけるスポーツ・ナショナリズムのみでなく、「日常」におけるスポーツとナショナリズムの結びつきもまた、論究に値するテーマであると考えられる。

4. 考察

以上のような先行研究の成果と限界を踏まえ、今後この領域の研究を前進させるために必要な作業は、以下の3点と考えられる。

(1) スポーツ・ナショナリズムの定義と整理

第1は、多くの研究が用いるスポーツ・ナショナリズムという語について、概念的に整理を行うことである。すでに述べたように、既存の研究は様々な現象をスポーツ・ナショナリズムの枠にくくっている。しかしそのことは、この現象の範囲を見えにくくし、検討を困難にしていると考えられる。

その際には、一般社会学のナショナリズムに関する知見が有効である。一般社会学では、ナショナリズムの性格や形態を区分し、この現象の見通しを良くしようとする作業が行われている。例えば吉野（1997）は、新たな国家の創造を志向するような創造型ナショナリズムと、平時の国民的同一感としての再構築型ナショナリズムを区別しようとした。あるいは植村（2014）は、人間単位へのこだわりとしてのナショナリズムと、地域単位へのこだわりとしてのナショナリズムを区分している。こうした知見を援用しながら、スポーツ・ナショナリズムとは何なのか、それはどのように区分できるのかについて検討していく必要がある。この作業は、有元（2012）が、スポーツ・ナショナリズムを2つの次元で類型化して論じようとしたことと、同一の方向を向いていると言える。

そしてまた、内海（2012）が指摘するように、スポーツ・ナショナリズムと、いわゆる政治的ナショナリズム[注6)]の関係性についても、議論を深化していく必要があるだろう。スポーツの場面で顕在化するナショナリズムについて、「90分間のナショナリズム」や「9イニングの愛国者」といった表現のされ方をすることがある。これらの表現の意味するところは、スポーツの場面で起こるナショナリズムはあくまでスポーツの場面に限定されたものに過ぎず、それが政治的なナショナリズムにまで発展することはないというものである。一方、若者がスポーツの国際試合の場面で屈託なくナショナル・シンボルを受け入れていることが、いつの間にか政治的場面にまでつながるのではないかと懸念する論者も存在する（香山2002など）。このようにスポーツ・ナショナリズムは、それがスポーツ場面に限定されたものに過ぎないのか、それともそうした感情が政治的な場面にまで飛び火する場合があるのかについて論争がある。

以上のように、事例を積み重ねるのみでなく、そもそもナショナリズムとは何なのか、スポーツ・ナショナリズムとは何なのかという点についての議論を深めることが、スポーツ・ナショナリズム研究の第1の課題と言える。

(2) スポーツとナショナリズムの結びつきに関する説明

第2に必要な作業は、なぜスポーツとナショナリズムは結びつきやすいのかについて、原理的に考察することである。

すでに述べたように、一般社会学はナショナリズムの発生・維持の問題を考察する中でスポーツにも言及してきたが、それは指摘のレベルにとどまり、なぜスポーツがナショナリズムと結びつくのかという説明はほとんどなされていない。一方で、他の装置、例えば言語には、以下のような卓越した説明がある。アンダーソン（1983=2007）は、18世紀半ばの西欧に着目し、出版資本主義の成立をこの地域における

ネーション形成の基底的要因としている。従来の印刷物は、少数の知識人にしか理解できないラテン語で書かれていた。しかしラテン語で書かれた印刷物の市場が飽和すると、次第に地域ごとの多様な土着の言語を用いた印刷物が出版されるようになる。こうした俗語で印刷された印刷物が流通することで、その俗語が通用する地域内である種の一体感が生まれるようになり、それがネーションの始まりになったのである。

このように、言語とナショナリズムの結びつきは理論的に精緻化されているが、スポーツとナショナリズムの結びつきについては、ここまで精緻な説明は行われていない。こうした点を深めていくためには、スポーツという文化の特質に着目する必要があるだろう。あくまで仮説的な見通しに過ぎないが、以下ではスポーツという文化とナショナリズムという現象の親和性の一端について考察してみたい。

大澤（2009）は、ナショナリズムという問題を複雑にしている1つの要因を、ネーションが時間的・空間的な次元において、特殊主義と普遍主義の2つの方向性を有していることに見出した。すなわち、あらゆるネーションは空間的に均質な共同性を求める一方で、必ずどこかに境界が引かれる。またあらゆるネーションは時間的に普遍な存在に見えるが、実は近代的産物に過ぎない。「普遍性への志向と特殊性への志向、真っ向から対立するこれら2つのベクトルが、いかにして、どのようなメカニズムに媒介されて接続することができるのか。普遍性への志向が、どうして、特殊性への志向へと反転するのか。ナショナリズムをめぐる探究が解明すべき中心的な問いは、ここにある」（p. 3）。

一方、近代スポーツという文化は、今ここで行われている競技であっても、空間的次元および時間的次元において普遍性があると錯覚させやすいという点において、ナショナリズムの原理と親和的だと考えられる。

まず空間的普遍性について見てみると、世界中の会場、特に国際大会が実施されるような会場では、国際競技組織が認証した統一的規格に則った設備が用意され、狂いのない計時方法が採用される。このように考えると、今ここでレースを行っている選手は、世界中の別の場所で走ったり泳いだりしている選手とも同時に競争していると言える。このように、特に高度な水準でのスポーツでは、記録の普遍性が求められるという点で、空間的普遍性が保たれている。こうしたプラットフォームの上で行われているものだからこそ、スポーツはネーション同士の対抗の感覚を生むと考えられる。もしもスポーツ競技が各地のローカルなルールで分断されているとしたら、これほどスポーツが人々のナショナリズムを喚起することはないだろう。

一方の時間的普遍性はどうか。近年の水泳の世界大会のテレビ中継では、レース中に過去の世界記録や大会記録と同一のペースを示す線が合成され、泳いでいる選手と同時に動く。このことは、目の前で実施されている競技は、その場にいる選手同士の競争のみでなく、過去の記録との競争でもあることを明示的に示している。このことに象徴的に示されるように、スポーツ競技では、過去の競技の記録や記憶が参照されることが多い。

さらに興味深いのは、団体競技における競争関係である。例えば、サッカー日本代表が韓国代表と対戦する際には、決まって過去の対戦成績では韓国が圧倒的に勝ち越していることが報道される。だが、当然ながら、今現在韓国代表と戦おうとしている日本代表選手のほとんどは、過去の韓国代表戦に出場していない。つまり、過去の負け越しの記録は、いわば他人の対戦記録である。しかし、過去の日本代表選手も、現在の日本代表選手も、同じ日本代表のユニフォームを着ている人物という点で同一視されるのである。団体競技における（ナショナル）チームは、その構成員が入れ替わろうとも、常に存在し続ける。このことによって、そのチームに関する記憶はリセットされず、それを応援する人々にとっての共通の記憶が常に更新され続けていくのである。

以上のように、スポーツは世界中同一のプラットフォームの上で、過去の記録を参照しながら競技が行われるために、空間的・時間的普遍性の感覚を想起しやすい。このことは、スポーツとナショナリズムの親和性を示す1つの要因となっているかもしれな

い。この点の論理関係については今後の課題としたいが、例えばこうした見方のように、スポーツがナショナリズムになぜ接続しやすいのかについて、近代スポーツの特質という点から論究することが必要だろう。ただしその際には、スポーツとナショナリズムの親和性を観念的に論じるのではなく、個別の事例について、ネーションとスポーツをめぐる権力関係にまで目を配りながら、その結びつきを解明する必要がある。

(3)「日常」レベルの事例の発見

スポーツ・ナショナリズムに関する研究を前進させるための第3に必要な作業は、より「日常」レベルでの事例を発見し、分析することである[注7)]。こうしたナショナリズムは、一般的にナショナル・アイデンティティと呼ばれる。

海外の研究に目を向けると、ナショナル・アイデンティティに関する分析は多い。英国圏では特にこうした研究が盛んであり、英国を構成する4つのネーションのスポーツ（Bairner 2001など）や、英国に隣接するアイルランドの民族競技（海老島2004、坂2006など）を通じたナショナル・アイデンティティ形成の事例が明らかにされている。確かに日本でも、在日中国人にとってのサッカーの持つ意味（巴2012）や、日系ブラジル人にとってのフットサル施設の果たす役割（植田・松村2013）などの事例は明らかにされているが、それらはライフヒストリーや生活システムに焦点を当てた研究であり、マイノリティのナショナル・アイデンティティに関する研究ではない。スポーツとナショナリズムの結びつきという現象をより多面的に理解するためには、こうした視角からの研究も必要だろう。

5. 結語

本稿では、日本におけるスポーツ・ナショナリズムに関する諸研究をレビューし、その成果と限界を明らかにしてきた。先行研究の成果は、スポーツとナショナリズムの結びつきについて多様な事例を発見した点と、研究上の方法論を提起している点であった。一方、その限界は、以下の3点であった。つまり、ナショナリズムの理解が無限定であること、記述的研究が多く説明的研究が不足していること、そして「非日常」的事例への言及が多く「日常」的事例への言及が少ないことである。今後は、スポーツ・ナショナリズムとは何なのかという定義を議論すること、スポーツとナショナリズムの結びつきに関する説明的研究を行うこと、そして「日常」レベルの事例を発見し、論究することが必要と考えられる。

注

注1）ネーション（nation）という語は、「民族」、「国民」、「国家」などと訳される場合が多い。この語は、人間の集団を示す「民族」および「国民」と、制度的枠組みである「国家」という2つの異なる次元の概念を包含している。このことについては様々な議論があるが、本稿では、ネーションとは基本的に人間の単位を示すものとし、制度的枠組みである「国家」にはステート（state）の語を当てることが適切と考える。

注2）土佐（2015）の書評である権（2016）もまた、日本のスポーツ・ナショナリズムの研究の成果と限界、今後の課題に触れている重要文献の1つである。

注3）土佐（2015）が述べるように、日本語のスポーツ・ナショナリズムという語は学術的に定着した語ではない。さらに、英語文献においてはsport nationalism、sporting nationalism、sportive nationalismといった表現が見られるが、それらも具体的にどのような意味合いを持つのかについての合意が生まれているとは言い難い。

注4）一般社会学の日本語文献では、ナショナリズムは「自らが所属するネーションを尊重する意識と行為の一般」（大澤2014、p. 14）、「ネーションおよびそれと等価な概念（国名等）の価値を報じる言論および実践の集合」（佐藤2009、p. 44）、「ネーションへの肯定的なこだわり」（植村2014、p. 11）などと定義づけられる。

注5）萱野（2011）は、こうした排外的･偏狭的ナショナリズム理解を強く批判している。

注6）ナショナリズム研究では、文化ナショナリズム対政治ナショナリズムという対比が用いられることがある。吉野（1997）は「文化ナショナリズムがネーションを独自の歴史と文化の産物およびそれを基にした集合的連帯としてとらえるのに対して、政治ナショナリズムは自分達の共同体を代表する国家の達成およびその成員に対する市民権の確保を通じて、自分達の集合的経験に政治的実現性を与えようとする活動である」（p. 11）と、両者を区分する。

注7）Billig（1995）が「平凡なナショナリズム（Banal Nationalism）」という概念を提示したように、近年のナショナリズム研究では、「日常」レベルのナショナリズムへの注目の必要性が唱えられている。坂（2006）や浜田（2016）などがこの視角を援用するなど、スポーツ・ナショナリズム研究でもこうしたレベルのナショナリズムへの注目が高まっている。

引用文献

アンダーソン，B.（2007）定本想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行　書籍工房早山（＝1983　白石隆・白石さや訳　*Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* Verso）.

有元健（2012）スポーツとナショナリズムの接合について　現代スポーツ評論27　pp. 34-49.

巴芳（2012）在日中国人社会におけるネットワークとアイデンティティの変容　日中社会学研究第20巻　pp. 95-104.

Bairner, A. (2015) “Assessing the sociology of sport: On national identity and nationalism” *International Review for the Sociology of Sport*, 50 (4-5) pp. 375-379.

Bairner, A. (2001) *Sport, Nationalism, and Globalization: European and North American Perspectives* State University of New York Press.

Billig, M. (1995) *Banal Nationalism* Sage.

海老島均（2004）スポーツ組織活動参与とナショナリズムの生成過程　スポーツ社会学研究第12巻　pp. 61-70.

浜田幸絵（2016）日本におけるメディア・オリンピックの誕生：ロサンゼルス・ベルリン・東京　ミネルヴァ書房.

ホブズボーム，E.，J.（2001）ナショナリズムの歴史と現在　大月書店（＝1992　浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳　*Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality (2nd edn.)* Cambridge University Press）.

石坂祐司・小澤考人（2015）オリンピックが生み出す愛国心：スポーツ・ナショナリズムへの視点　かもがわ出版.

金子史弥（2015）2012年ロンドンオリンピックにみるナショナリズム：スポーツの「国家戦略」化と「多民族国家」をめぐる表象に着目して　石坂祐司・小澤考人編著　オリンピックが生み出す愛国心：スポーツ・ナショナリズムへの視点　かもがわ出版　pp. 187-215.

香山リカ（2002）ぷちナショナリズム症候群：若者たちのニッポン主義　中公新書ラクレ.

萱野稔人（2011）ナショナリズムは悪なのか　NHK出版.

黒須朱莉（2014）IOCにおける「完全な国旗国歌廃止案」の消滅（1973-1974）　一橋大学スポーツ研究33巻　pp. 61-71.

権学俊（2016）書評　土佐昌樹編著『東アジアのスポーツ・ナショナリズム：国家戦略と国際協調のはざまで』　スポーツ社会学研究第24巻第2号　pp. 69-75.

権学俊（2006）国民体育大会の研究：ナショナリズムとスポーツ・イベント　青木書店.

中村敏雄（1978）スポーツナショナリズム　大修館書店.

大澤真幸（2009）ナショナリズムという謎　大澤真幸・姜尚中編著　ナショナリズム論・入門　有斐閣アルマ　pp. 1-35.

朴順愛（2016）日本のスポーツナショナリズム：プロレスラー力道山を中心に　朴順愛・谷川建司・山田奨治編著　大衆文化とナショナリズム　森話社　pp. 266-292.

坂なつこ（2006）ナショナリズムとグローバリゼーショ

ン：アイルランドのスポーツを例に 一橋大学スポーツ研究25巻 pp. 11-18.
坂上康博（1998）権力装置としてのスポーツ：帝国日本の国家戦略 講談社選書メチエ.
佐々木浩雄（2016）体操の日本近代：戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉 青弓社.
佐藤成基（2009）ナショナリズムの理論史 大澤真幸・姜尚中編著 ナショナリズム論・入門 有斐閣アルマ pp. 39-62.
寺沢正晴（2016）戦後日本の人気スポーツとナショナリズム 朴順愛・谷川建司・山田奨治編著 大衆文化とナショナリズム 森話社 pp. 294-335.
土佐昌樹（2015）東アジアのスポーツ・ナショナリズム：国家戦略と国際協調のはざまで ミネルヴァ書房.
内海和雄（2012）オリンピックと平和 不昧堂.
植田俊・松村和則（2013）セーフティネット化する移民のスポーツ空間 体育学研究第58巻第2号 pp. 445-461.
植村和秀（2014）ナショナリズム入門 講談社現代新書.
山本敦久（2010）スポーツ観戦のハビトゥス：人種化された視覚の場と方法論的ナショナリズム 橋本純一編著 スポーツ観戦学：熱狂のステージの構造と意味 世界思想社 pp. 256-279.
吉見俊哉（1999a）ナショナリズムとスポーツ 井上俊・亀山佳明編著 スポーツ文化を学ぶ人のために 世界思想社 pp. 41-56.
吉見俊哉（1999b）ネーションの儀礼としての運動会 吉見俊哉・白幡洋三郎・平田宗史・木村吉次・入江克己編著 運動会と日本近代 青弓社 pp. 7-54.
吉野耕作（2007）若者の「右傾化・保守化」とナショナリズム：社会調査を通して大学生と共に考える 関東社会学会年報社会学論集 pp. 2-12.
吉野耕作（1997）文化ナショナリズムの社会学：現代日本のアイデンティティの行方 名古屋大学出版会.

付記
本研究は、平成28年度奨励個人研究費による研究の一部である。